

その他

同年兵は

皆サイパンで戦死

京都府 佐藤 春治

大正十一（一九二二）年二月五日、私は当時の京都府加佐郡岡田上村という所の農家の三男として生まれました。学校を卒業し、三男であるので家業を継がず、舞鶴の海軍工廠（現在の日立造船の前身）に幼年工として入所、工廠で教育を受けました。ですからいわば「舞鶴工廠生え抜きの技術工」として教育を受けたのであります。

そして設計におりましたから、駆逐艦「夕月」「潮

風」その他の設計という仕事に従事しました。舞鶴工廠の工廠長は将官クラスであり、工廠では主として駆逐艦を建造しておりました。入廠は昭和十四（一九三九）年頃ですが、まだ少年兵の私は教育と修業を受け、仕事は最初から図面のトレース（写し）から教育を受けました。ご承知の人もおると思いますが「烏口」に墨を入れ原図を写す、トレーシングペーパーに書くのです。しかし、烏口とは、烏の口ばしのような形をしたもので、細く書くため、墨を入れる先を余り削ると薄い紙なので破れてしまう。その削り加減が難しいのでした。初期の頃は、先輩の作業の下準備のような仕事でした。

その後は、だんだんと仕事も覚え、トレースもできるようにになると技術者として高度な作業まで命ぜら

れ、その後は製図までやりました。

造兵課の中には、電気・水雷等があり、重量科という所では艦全部の重量を計算するのです。何万トンの戦闘艦から何百トンという小艦艇まで、大砲からマスケット、艦の装甲という（鉄板の厚さや形など）まで、細かく計算するので、その細かい計算の累計により総トン数・排水量を出すわけです。

工廠には造兵・造船・造機と三部門があり、私は造兵の仕事でした。当時から特に戦時になると、民間の船が徴用され、船の中部を改造する。火器を作ったり、船室を作ったりするのです。そのため改造艦の図面も書きました。先ほど申しました造船・造機・造兵関係部門があり、その中に電気なども当然ありました。

私の仕事は徴用艦船で、主に輸送関係の船が多くありました。戦中特に、外地よりの重要物資の輸送、兵員の輸送等の海軍に対する任務が増えました。従って、工廠としては、戦うための輸送、補給が重要になったのは当然でありましたでしょう。

私も入廠四、五年になり、廠内の様子も、仕事の状況も把握し、若いながら一人前の技術員として、あれや、これやの仕事をしておりました。

先に申した通り、私は造機でありましたが、今までは駆逐艦専門の舞鶴工廠にも巡洋艦も入ってきました。舞鶴は、海の深さの関わりもあり何万トンという戦艦は中まで入ってはきませんでした。が、改造徴用船、輸送船は随分入り、私も、船内改造の図面も書いたりしていました。また、入廠四年も過ぎたので、臨時から本工廠となり、一等工員と身分も進むと共に、任務も重くなりました。

昭和十七年の徴兵検査では甲種合格で、昭和十八年徴集兵とし、同年三月、旧福知山歩兵第二十連隊へ入営したのでした。私は、三男坊でしたから家庭のことは心配ありませんでしたが、今までの四年は、海軍関係勤務が、今度は正式の現役軍人として歩兵部隊への入営で、若干は勝手が違い、不安が無いでもありませんでした。

旧歩兵第二十連隊は、中部第六十三部隊という名称に代わっております。三月入営し、いわゆる初年兵教育、五月には一期の検閲があり、我々の部隊は軍旗を持って、中部第二部隊に移動となりました。現役兵による部隊が編成され、兵舎は名古屋城内にありました。

昭和十九年二月、私は上陸作戦に伴う専修要員に選ばれ、輸送船より上陸用艦艇への乗降訓練でありました。また、完全軍装の重量まで雑のうに石を入れ、銃はピーポー銃（模擬銃）を持ち、二月の寒中に用木地に飛込む訓練までしました。寒いこと寒いこと、昼間に二時間位寝かせてもらうだけの、厳しい、苦しい訓練でした。

師団長は賀陽宮殿下でしたが、他の師団長と代わり、昭和十九年五月、第二部隊は、三日間かけて兵営を出発しました。表門、裏門と分かれて秘密裡に出発したのです。どこから汽車に乗ったのか、どこから船に乗って、どこへ上陸したのか分かりませんでした。後に分かったのですが、本隊はサイパン島へ上陸した

のでした。

私は、初年兵教育が終わり、一選抜の上等兵になり、憲兵学校で教育を受けるよう命ぜられました。第一中隊に入り、一個班二十人程度で四個の内務班、それが四個中隊あり、計三百人程で憲兵学校で教育を受けたのでした。

部隊がサイパン島へ出発する、私はその前に先ほど申した上陸作戦に伴う専門教育を受けていたのです。しかし、五月部隊出発前、私は中隊長の命令で憲兵学校の第二次試験の可否決定まで部隊に残れと申され、内地へ残ったのであります。

部隊は出発し、中隊が空になりました。その頃、開業医師が召集され、私は外地出発まで、軍医に対する軍隊教育の助手を命ぜられたのです。軍医に対しては、気を付けからの基本教育をしたのです。年配者の医師、軍医ですから、階級は将校です。若い私が、細かいところまで気を使いながら初歩教育をするのですからいまでも階級を越えた教育は、かえってやり辛いものだと思います。

七月、憲兵学校試験には中部第二部隊より四人合格しました。私は引率者となり、東京中野の憲兵学校に入校しました。私の階級は一選抜上等兵でしたが、その後、卒業まで上等兵のままでありました。

憲兵学校の教育は、「逮捕術」「ピストルの射撃術（十四年式拳銃という大きな拳銃）」「乗馬術」「格闘術」などの学科もありました。とにかく実際には、階級を越えての職務執行ですから、なかなか厳しいものでありました。

教育期間は七月から十二月の六カ月間でしたが、内務には下士官と、班付上等兵がいる。その上等兵が入院したので、私が衛門の歩哨勤務の時、私が歩哨係や、営舎係となるが、その時だけ班付上等兵の勤務をするのです。候補生としての班付は上等兵勤務者にはほとんどいなかったでしょう。

十二月、卒業を前にし校庭で検閲の実施中に米軍のB29爆撃機の来襲があり、一時中断するという緊迫した状態もありました。卒業して、舞鶴地区憲兵隊勤務を命ぜられた四人を引率して赴任し、警務課勤務とな

り、実際の憲兵の初任者と終戦近い時期の任務をしたのでありました。

私は当然外地勤務だと覚悟していたのですが、警務係でありました。道路の整理や、駅での取り締り、徴兵検査や点呼での取り締り。上官学校や下士官以上の結婚等の身元調査もしました。

駅では、貨物列車の出入りの数の検査等をしました。が、「東舞鶴」勤務中、不法者一人を逮捕しました。軍帽を被っているが階級章も脚絆もはいていないので、憲兵隊へ連れていったら、逃亡者でありました。その取調べは上官がやりました。

昭和二十年四月宮津へ転属し、補助憲兵十五人を指揮し、勤務していました。そのうち上等兵は二人で、他は一等兵の人でした。六月頃には舞鶴軍港に駆逐艦が分散しているところ、山の上の空から空襲、機銃掃射を受けましたが、我が軍の防空隊の射撃で一機が宮津と天の橋立の間に墜落しました。その遺骨は憲兵隊で保管していましたので、戦後進駐軍に渡しました。

その前後に舞鶴工廠が空襲を受け、大分被害が出ました。どこがどうなったかは分かりませんが、死亡者もありました。空襲時の民衆の移動指示はしませんでした。

終戦では残務整理で残って、銃や、剣などの兵器をそろえて、取りにきました舞鶴の木隊に渡しました。

この残務整理には二カ月ほどかかりました。

その後、私の方や、私の分隊からは呼び出しなどはありませんでした。憲兵に対しては、戦後も、戦中のいろいろな問題に対する呼び出し等もあったようです。それには、戦中の戦犯問題で疑惑をかけられ、C級戦犯で罪を負わされた人も多くあったのですが、単に憲兵だったという理由から不利な処遇をされた人もあったと聞きます。

私はこのようにして生きて帰り、生きて現在もここにおります。しかし、私があつた時、隊長から「憲兵学校の二次試験の合否が決定するまで部隊に残れ」との命を受けたから私の現在があつたのです。

私は内地で、九月、サイパン玉砕の通達を聞きました。名古屋で編成され私が所属した師団は第四十三師団（營第一一三・九一部隊）であり、名古屋編成の部隊は、歩兵第一三五連隊（營第一一九三・四部隊）でありました。この營兵団は、歩兵第一一八連隊（静岡）、歩兵第一三六連隊（岐阜）と前出の名古屋連隊とが所属部隊でありました。

そして、その部隊、第三十一軍の隷下部隊であり、独立混成第四十七旅団（備第一七五二・八隊）、直轄部隊は歩兵第十八連隊の一部、歩兵第八十九連隊第三大隊（本隊は沖繩玉砕）、野砲兵第四十四中隊、独立山砲兵第三連隊、高射砲第二十五連隊、独立高射砲第四十三中隊、独立工兵第七連隊、独立自動車第二六四中隊、同第二七八中隊、戦車第九連隊（拓第一二〇八九）、第六十碇泊場部隊（暁第一六七二・三部隊）です。テニアン島は、第二十九師団の歩兵第五十連隊、グアム島は、第二十九師団主力の歩兵第十八・第三十八連隊ほかであり、共に玉砕しています。

私は、憲兵隊の二次試験のため、内地に残留したの

ですが、もし、部隊と共にサイパンへ行っていたら玉砕し、今日の私はありませんでした。ですから同年兵は皆、戦死してしまいましたので、当時の戦友は一人もおりません。従って戦友会もありません。

思えば、軍隊とは運隊であり、生き残って憲兵として勤務したところが、私が少年工として入営前まで勤務した舞鶴であります。多くの戦友が死んだサイパン戦のことを戦記で読んだりしますが、彼の地で玉砕した戦友の顔が思い浮かぶことがしばしばあります。

【解説】

サイパン島守備の主力の、第四十三師団（營第一一九三一部隊）は、昭和十九年四月に、次のように編成した。

師団司令部・歩兵第一一八連隊（静岡編成）

歩兵第一三五連隊（名古屋編成―佐藤春治氏所属）

歩兵第一三六連隊（岐阜編成）・第四十三師団通信

隊・同兵器勤務隊・同経理勤務隊・同野戦病院・同

輜重隊

南部地区隊は、独立混成第四十七旅団であり、満州の各師団から選抜された三、四年兵主隊の精強部隊で、次の諸部隊から成っている。

独立歩兵第三一五大隊（歩兵第十四連隊第三大隊）

独立歩兵第三一六大隊（歩兵第四十連隊第三大隊）

独立歩兵第三一七大隊（歩兵第十連隊第三大隊）

独立歩兵第三一八大隊（歩兵第八十九連隊第三大隊）

隊）

独立混成第四十七旅団砲兵隊（野砲第十連隊第三大隊）

隊）

同工兵隊（工兵第二十五連隊第三中隊）

ほかに、戦車隊・独立山砲第三連隊・独立臼砲第十四大隊・独立臼砲第十七大隊、第二十五高射砲隊・独立工兵第七連隊・船舶工兵第十六連隊が陸軍の主たる部隊である。

海軍主要部隊は次である。

第五根拠地隊、第五十五海軍警備隊、横須賀第一特

別陸戦隊、その他。

陸軍 二八、五一八人・海軍 一五、一六四人
合計 四三、六八二人

ほかに在留邦人約二万人である。

日本軍の火砲と戦車

一五センチ (以上) 榴弾砲 三〇門

一〇センチ (以上) 榴弾砲 二一門

山 砲・三センチ 五七門

速射砲 二四門

大隊砲・迫撃砲 八四門

高射砲 四四門

砲数合計 二六〇門

軽戦車 一六両

中戦車 四六両

米軍の火砲と戦車戦力 (サイパン戦)

一五センチ (以上) 榴弾砲 二八六門

一〇センチ (以上) 榴弾砲 四四八門

山 砲・三センチ 四八門

速射砲 二一〇門

バズーカ砲 一六七四門

大隊砲・迫撃砲 二九七門

高射砲 八門

砲数合計 二九七一門

中戦車 一五〇両

ただし、陸軍主力、第四十三師団中の歩兵第一一八連隊は、昭和十九年六月四～六日、米潜水艦に撃沈され、伊藤豪連隊長以下二、二四〇人戦死、兵器、資材等はほとんど失う。生存者約一、〇〇〇人のうち半数は火傷のため入院、同乗の独立白砲二個大隊、独立戦車二個中隊、野戦飛行場設営隊の多くの兵員、戦車、白砲、その他の兵器・資材すべて海没した。

海軍の戦闘主力兵力は、第五十五警備隊二、〇〇〇人、横須賀陸戦隊六〇〇人の計二、六〇〇人程度で、ほかは航空、船舶、病院、施設関係者であった。

昭和十九年六月十五日午前六時過ぎ、米軍は艦砲射撃並びに航空機の援護により上陸を開始した。水際での日本軍の集中砲火に米軍の水陸両用車は転覆炎上し、上陸を頓挫させたが、海岸線の陣地や対戦車壕も米軍の砲爆撃のため破壊され、残ったのはジャングル内の陣地のみとなった。

十五日、上陸した米軍主力は、歩兵一七個大隊、第二海兵師団、第四海兵師団、第二海兵連隊（予備軍）、同砲兵大隊、第四海兵師団砲兵隊、戦車二個大隊だったという。

第四十三師団がサイパン島に到着し、当時の隊員の話では（戦後聞いた）、島へ上陸したが、陣地構築が間に合わなかったという。主力第四十三師団が到着してからまだ一カ月、しかも同師団の第二次軍（静岡歩兵第一一八連隊）は前述のごとく大損害を受け、戦力ほとんどゼロに近い状態で守備に加わったのである。

また戦車も、日本軍は九五式軽戦車、九七式中戦車（重量一五トン、四七ミリ戦車砲）であるのに、米軍

のM3中戦車（二八、五トン、七五ミリ戦車砲）、M4中戦車（重量三三トン、七六ミリ戦車砲）が主力であるから、重量、備砲ともに日本軍よりは遙かに上回っていた。M4の装甲板は日本軍の戦車砲では貫通しないほど厚い。従って、最後に肉薄攻撃以外にはなかったのである。

南雲司令官、斉藤師団長が最後の総攻撃に関する命令を全守備隊員に発したのは七月五日であった。そして七月六日、司令官等は自決、日没と共に第一三五・一三六連隊の軍旗が谷間で奉焼され、無念の思いは將兵に燃える軍旗に手を触れ別れを告げた。七日午前零時、総攻撃のため鈴木大佐以下約三、〇〇〇人が集結した。杖にすぎる負傷兵、在郷軍人、警防団員、青年団の一般邦人も交じっていた。武器のない者も多かった。小銃は一〇人に一挺程度しかなく、竹槍やこん棒を手にし、石だけを持つ者もいた。

日本軍は午前三時を期し、米軍に向かって突進した。米軍は照明弾を打ち上げ、砲火を浴びせてきた。

しかし、この日の日本軍は絶対に引き返さなかった。死体を乗り越え、乗り越えて何十波という集団で突き進んで、主力は米歩兵第一〇五連隊、第一、第二大隊の第一線を突破して、後方の砲兵陣地まで突入した。第一大隊長は味方の斉射を浴びて戦死した。米軍は六五〇人以上の死傷者を出し逃げまどった。

日本人はこの「バンザイ突撃」を最後にして散っていった。「悲劇のサイパン」であった。

夫を国に捧げた

戦後の苦難

神奈川県 橋本 喜美子

私は、長崎県対馬厳原町の生まれです。故郷で定年六十歳まで勤めて、長男が東京の大学卒業後、厚木で勤務していますので、九州は遠いから近くに住んで欲しいということ、厚木市に住むようになり五年になります。

郷里は、県の出先機関も多く官庁や商店が多い町で、高い山と海に囲まれた静かな城下町です。当時対馬は、一つの町と三十位の村が一緒になり、現在は町村合併で町が多くなっています。町の真ん中に川が流れ、六メートルの高さの立派な護岸工事がしてある堤防があり、川幅四四メートル位の立派な川で、海へ流れています。

川には手摺のついた立派な橋があります。特に県道は広い道で、八幡宮、銀行、電話局、郵便局、ホテル、旅館、病院などがある大通りです。いつまで経っても故郷は忘れられない、懐かしいところです。

終戦後五十八年になり、私たち未亡人も少しずつ落ち着いた生活ができるようになった頃かと思えますが、未亡人も高齢になり、十年前の半数近くになり、ほんとうに寂しくなりました。平均年齢も八十五歳だそうです。

夫を失い、幼児を抱いて、若い妻が生活とたたかっ
てゆく姿は悲壮なものでした。私も主人が長崎市生ま